



社会福祉学部の国際交流

本研究所研究員 小泉 尚樹
(哲学)

熊本学園大学社会福祉学部は韓国の私立大学である順天郷大学校と協力して平成23年以来、毎年「教育交流会」を開催している。平成26年は9月にわれわれの学部の社会福祉学科、子ども家庭福祉学科、ライフ・ウェルネス学科の学生たちと教員が順天郷大学校を訪問し、11月に同大学校から社会福祉学科、青少年教育相談学科、行政学科の学生27名と教員4名が来学した。11月の歓迎の様子は大学ホームページの当時のニュースにもあったように、社会福祉学部の学生と教員が一行を出迎え、本館4階のグリルで歓迎レセプションを開催した。レセプションでは幸田亮一本学学長に続き、訪問団のナム・サンイン教授が挨拶し、懇親会では久しぶりの再会に固く握手を交わすなど教員と学生ともども歓談を楽しんだ。

ところで本学社会福祉学部は平成25年3月、上記の三学科が所属する順天郷大学校人文科学大学ならびに社会科学大学と学部間交流協定を締結した。学部間国際交流は、それまでの本学の大学間国際交流に加わる新たな国際交流の可能性として、近年承認された国際交流の新方式である。これにより本学のそれぞれの学部の特色に応じた国際教育交流がより活発になることが期待されるであろう。

文部科学白書によれば、毎年のように、大学の国際化や双方向の留学生交流の推進が、わが国の人材を育成するうえでの喫緊の課題に掲げられている。社会福祉教育の分野においても日本人学生がアジアや欧米各国の社会福祉の事情を学び、国際的な教育交流をとおして、日本の社会福祉の問題を広い視野の中

で考えられるようになること、またそれとともに外国人学生もまた日本で学び、日本や母国の社会福祉を考えられるようになること、こうしたことがいかに有意義であるかは言を俟たない。しかしそれには特有の困難もまた伴う。その一つは言葉の壁である。言葉が分からなければ異文化理解は難しい。またそうした努力を傾け外国の事情を学ばねばならない学習の必要性や意義が実感されない、ということもあるだろう。とりわけ地方大学で社会福祉を学ぶ学生にとって、そうした学習は縁遠いことだとさえ思われるかもしれない。とはいえ日本の社会・経済のますますのグローバル化の進展は実際のところ、社会福祉の人材育成にも影響を及ぼさずにはおかないであろう。仮に影響を及ぼさないとしても、幸福な社会の構築に寄与しようとする社会福祉学部が人材の育成において、他者や少数者の視点に立つことを知らぬ人間を社会に送り出すことはないであろう。こうした意味では、社会福祉学部にとって国際化や異文化理解はその教育の延長線上にあるとともに、それによって社会福祉の教育ならびに人材育成の真価がはかられる試金石になる、といっても過言ではない。それゆえそれはわれわれの大学の課題ではないと高をくくって放置しておくことはできまい。日本社会の少子高齢化や社会・経済のグローバル化が現実にとどのように進んでいくにせよ、日本がいかなる社会になるかは、グローバル化に対して、そして他者や異文化に対して、それぞれの若者が大学教育の中でどのような対応を学び、また教養を身につけてきたかにかかっていると思わ

れる。この点で国際的な教育交流を活発にし、学生が広い視野と他者への配慮を身につけることを学ぶため、社会福祉系の大学教育の中で、国際化や異文化理解の担う役割と責任は決して小さくはない。

われわれの社会福祉学部を振り返ってみれば、これまで本学部に学び卒業していった外国人留学生の数は決して多くない。かつて本学に学んだ中国人留学生が本国に帰り、中日の合弁企業で働いているという情報を得て安堵することがあったが、そうした情報が寄せられるのは、少数の卒業者の中においてもまれな場合というべきであろう。さらに社会福祉学部の外国人留学生の在学学生数は平成20年頃には13名を数えていた。それも年々減少しており、協定校やその他の大学からの派遣留学生も皆無に等しい状況である。文系の学部のなかでも社会福祉分野は国内外での就職環境が厳しく留学生が敬遠する傾向にあるようだ。こうした留学生環境の中で日本人学生が外国人学生と親しく交わり、外国への関心をもつようになることを期待するのはますます難しい。またさらに社会福祉学部の学生たちは国内の様々な資格の取得のための勉強に勤しみ、休みの期間は実習に、勉学の合間はアルバイトに精を出さねばならず、海外に関心を向けている暇がないほどである。

われわれの学部が韓国の順天郷大学校社会福祉学科と交流を持つきっかけは、地域の国際交流事業であった。熊本県菊池市が韓国忠清南道アサン市と交流を深め、当時の菊池市長が本学OBであったことが幸いして、同学科が平成19年菊池市を訪問した折に本学に表敬訪問したのが始まりである。菊池市との交流が続く間、同大学は本学に来訪した。当初は仲介の労を取られた和田要教授のゼミの学生たちが交流し、社会福祉についての意見交換をおこなった。平成20年に同大学が菊池市との交流事業を終了した後は翌年に、本学部との教育交流を目的に学生訪問団の本学への派遣を開始した。その後本学部としても新た

に立ち上げた「国際教育を考える委員会」において学部の国際交流の在り方を検討し、学部の交流事業として平成23年9月、中野元教授を団長とする第1回学生訪問団を韓国順天郷大学校に派遣した。そのさいすでに本学とは大学間交流で長いお付き合いのある韓国大田大学校にも大変お世話になった。あらためて感謝申し上げたい。そして平成25年3月韓国順天郷大学校において、本学社会福祉学部と韓国順天郷大学校人文科学大学ならびに社会科学大学との間で学部間交流協定を調印するに至った。



このように交流の発端はさまざまな偶然と多くの人たちの善意に支えられた。これを「縁」として、有意義な交流を続けることができるかどうか、はわれわれとそして順天郷大学校双方の意志と努力にゆだねられていよう。さしあたりその意志と努力は「教育交流会」に年々少しずつ付け加えられる新しい変化にみてとられるであろう。以前から韓国での交流会は学部を挙げて取り組んでいる様子が感じられた。教員の指導を受けつつ学生たちが一つになって交流会を企画し、運営しているという印象である。順天郷大学校の人文科学大学には上記の青少年教育相談学科のほか芸術制作関係の学科があり、その中の演劇舞踊学科の学生たちが「教育交流会」の開会でわれわれの訪問を創作ダンスのパフォーマンスで歓迎してくれる。このアイデアはわが大学でも取り入れるようになった。昨年度は子ども家庭福祉学科の学生たちによる韓国

語劇「大きなカブ」が演じられた。また今年度の本学での「教育交流会」では同学科の学生約80名が歓迎の創作ダンスを披露してくれた。これには韓国の学生たちが大喜びであった。またこれに先立つ9月の韓国の「教育交流会」では、両大学の発表を教員が評価し合い優秀な発表を表彰しようという提案があった。そしてみごと第一位を獲得したのは、本学の社会福祉学科の学生たちが行った、両大学の学生の社会福祉への意識の比較調査の発表だった。着眼点がユニークであったとともに両大学の学生が知りたいと思う内容を、両大学の社会福祉学科の学生へのアンケート調査として取り上げた点が評価されたと思われる。特に韓国側の先生たちの評価が高かった。

ここで「教育交流会」の内容をもう少し紹介しておこう。両大学の訪問団は訪問先の大学で開催されるこの交流会で研究発表をするのがきまりである。それゆえ例年韓国では9月に、日本では11月にこの交流会を開催している。本学社会福祉学部では平成25年度からこの交流会に参加することを目的とする「海外フィールドワーク」という名称の授業科目を立ち上げ、単位化した。どの学科からも受講が可能な共通科目のスタイルである。この科目を受講する学生たちは4月以降、グループをつくり、自分たちの関心のあること、学んできたことを発表できるよう春学期の授業時間を通じて準備する。特にパワーポイントを使い、映像や韓国語を組み込み、15分程度の発表に仕上げるのが肝要である。そしてそれを韓国の日本語通訳者に送付し、韓国語の修正、必要ならば韓国での学生アンケート調査などを依頼して韓国での発表に備えるのである。

こうした発表会が可能となるには社会福祉に精通する通訳者の存在が大きい。幸運にもこの交流に携わって通訳と資料の翻訳を引き受けてくれているキムジュヒさんは大学院生時代に熊本で社会福祉を学んだエキスパートである。日韓双方の専門的な用語をよく理解

して翻訳してくれる。学生のよき先輩であるのみならず我々教員の頼りになる相棒でもある。また韓国側の日本語通訳の層の厚さには敬服するところがある。もともと人文科学大学には日本語に堪能な教授がおられる。また今回キムさんはかつてこの研修に参加経験のある将来有望な二人の順天郷大学校卒業生を通訳として伴ってきた。こうしたことはわれわれの大学でも期待したいし、韓国語を知ろうという我々自身のよき刺激ともなった。

語学能力が外国の大学生と交流しようという気持ちを控えさせる壁になっていると感じることは誰にでもあるのではないだろうか。社会福祉学部が交流協定をむすんだ順天郷大学校にしる、またここでは詳しく触れる機会がなかったが、同じく平成26年3月に学部間交流協定を締結したドイツ国デュッセルドルフ市のハインリヒ・ハイネ大学人文学部にしる、それぞれの大学が日本に寄せてくれる強い関心、いずれもが社会福祉制度やボランティア活動、少子化、高齢者や認知症といった共通に抱える社会の問題をとおして日本に、そして日本の若者たちに寄せてくれる関心、この関心や思いに勇気を与えられて、交流しよう、学生を相互に派遣しよう、と突き動かされ、学部教授会に提案してきたのは確かである。しかし日本に関心を持ってくれる、日本語をしゃべってくれる、というそのことに甘えているだけでは国際交流はおそらく長続きしないであろう。先にも述べたようにこの始まりを機縁として大切にしつつ、交流相手の国の文化や社会を相手の国の言葉をとおして深く学び理解しようとする意志と努力を持ち続けることが大事だと思う。－言葉が通じない中で気持ちが通じたことの喜びはとて大きく…また同じ年代の人たちなのに自分にはない考えや知識を持っていて…もっと自分を成長させたいと思いました－これはある学生のレポートに記された感想である。学生たちの可能性をさらに引き出すことができればと願う。